

## 全体講評

はじめに気がかりなことを一つ。

前回の全体講評で、「データの統計分析をはじめ、しっかりとした研究ベースで行われた実践報告が増えていることは、喜ばしい限り」と書いたように、本賞への応募作について最近の傾向を見てみると、授業実践として優れているだけでなく、先行する研究や実践をしっかりと踏まえたうえで、独自の工夫を加え、またその効果を客観的な指標によって裏づけるという、「研究的な視点」を備えた実践研究が年を追うごとに増えてきているという実感があり、「理論と実践の往還」という本学が掲げてきた大きなテーマに合致した方向性と、大いに喜んでいたところでした。

ところが今回の応募作に限っては、一転して、多くがいわゆる「実践報告」ないしは「活動紹介」のレベルに留まっていて、研究的な視点が弱いのではないかとの意見をいただきました。中には、「これは修論のない教職大学院に移行した影響か？」との質問も出されましたが、必ずしもそういうわけではなさそうです。

新しい教育方法をたんに「自分も取り入れて実践した」ではなく、先行する理論や実践を踏まえたうえで、ご自身の実践のテーマを明確にし、その独自性についてきちんと論考していること、また実践の効果を、エピソードや教師の印象ではなく、明確な根拠に基づいて確認することなど、研究的な視点を持ったまとめ方にぜひ留意して応募してください。今回の傾向が、今回限りであってくれればと願っています。

さて、今回も前回に引き続き、若手の先生方に多数応募いただきました。全体の印象としては、いずれもしっかりと丁寧で堅実な実践が行われているとの評価をいただきましたが、その一方では前述のように、この実践ならではの先進性・独創性という点で弱さが見られる、との指摘もいただきました。今回は、多くが単一事例の実践報告でしたが、若手の先生方でするので、今後さらに実践事例を増やしていかれる中で、研究の広がりと深まりを期待したい、という結論に落ち着きました。ぜひこれからも実践の幅を広げていただくとともに、ご自身の実践の独自色にもいっそう磨きをかけられ、その成果を再度ご応募いただければと思います。お待ちしております。

なお、今回もうひとつの傾向として、ご自身の実践についてまとめたものではなく、一般に行われている実践について広く調査した結果をまとめた、いわゆる調査研究と言うべき応募作が複数ありました。本賞は基本的に、優れた実践を行っている実践者本人に対して贈

られるものであり、調査研究はこの趣旨になじまないものと考えます。調査研究は、学術専門誌への投稿をお薦めします。

以上、本年度の審査を終えての感想でした。今後ともどうぞよろしく申し上げます。

辰野千壽教育賞実行委員長